JSMR　多文化関係学会

2024 年度　北海道・東北地区研究会

日時：2024 年 6 月 1 日（土曜日）
場所：藤女子大学　北 16 条キャンパス
〒001-0016　札幌市北区北 16 条西 2 丁目
＜地下鉄南北線　北 18 条駅から徒歩 4 分＞

★参加は会員・非会員を問いません！

一部と二部どちらか一方の参加でも OK です。

第一部　**特別企画**　**（13：00～14：30@2 階食堂エレベーター前ホール）**

健康寿命とダンス

日本人がもっとも苦手とするダンス。
それはリズム感がないからでしょうか？もしそこに長生きの秘訣が隠されているとしたら？
本セッションでは、Rhythmix 代表兼インストラクターの田村留美先生が、今流行りの K-pop・HipHop・フラダンスと三種類のダンスから、健康をつかさどる秘訣をお教えします。
運動理論からの逆説ダンスをお楽しみください！

＊動ける服装でお越しください。老若男女どなたでも楽しめるプログラムです。激しい運動は行いません。

田村留美先生の略歴
日本体育大学女子短期大学卒業
Japan エアロビクスカウンセル プロフェッショナルコース修了
幼稚園教諭・YMCA 健康福祉専門学校講師を経て 1992 年 Dance&Fitness サークル『Rhythmix』を創立
東京都品川区において実技講演会『体のものさし』を毎年開催
福祉児童館・障害者指導員としても活動中

第二部　地区研究会　（15：00～16：30@458 教室）

★ 第二部は zoom での参加も可能です。参加ご希望の方は、5/24（金）までに李鳳（b.lee@hokkai.ac.jp）までご連絡ください。申し込みフォームを送付します。お申込みいただいた方々には zoom の URL を研究会前日までには送ります。

関係性が生む個の存在－そしてそれから

話題提供者：久保田真弓先生（関西大学名誉教授）

講演概要

ケネス・J・ガーゲンは著書『関係からはじまる―社会構成主義がひらく人間観』で二つの自己概念の捉え方を提示しています。一つは、「境界確定的存在(bounded being)」で、これまで日常生活でも研究でも個と個の関係性からコミュニケーション問題等を考えたりしてきた見方です。例えば、独立した個を前提にしてコミュニケーション能力を測定したり、他者との競合で優劣を決めたりすることです。

それに対してもう一つは、「関係規定的存在(relational being)」という捉え方です。自己は、他者との関係によって規定される存在で、まずは関係性から人々の行為を見ていきましょうという概念です。
VUCA（不確実性が高く、将来の予測が困難な状況）の時代を迎え、益々個人の能力開発に焦点があたる昨今だからこそ、視点を変えて他者との共創に向けた関係のプロセスに焦点をあてて自己概念を捉え直すことの意義があると思われます。

そこで本講演では、これらの概念が一般的に個人主義に対して集団主義と言われる日本人や日本文化で形作られる私たちにとってどのような意味を持つのか、研究に取り入れる視点としてどのような意義があるのかを皆様とともに考えていきたいと思います。

著書

『「あいづち」は人を活かす―新しいコミュニケーションのすすめ』（2001 年）
『異文化コミュニケーション論―グローバル・マインドとローカル・アフェクト』（共著、2012 年）
『大学教育をデザインする―構成主義に基づいた教育実践』（分担執筆、2012 年）
キャロライン・モーサ著『ジェンダー・開発・NGO―私たち自身のエンパワメント』（共訳、1996 年）。
What is “Communication”？―Beyond the Shannon & Weaver’s Model―（2019, *International Journal for Educational Media and Technology,* Vol.13, No.1, pp.54-65.）他論文多数。

研究会は二部構成となっておりますが、どちらか一つの企画への参加でも構いません。
研究会全般に関するお問い合わせ：藤女子大学　伊藤（itoakemi@fujijoshi.ac.jp）
Zoom 参加のお問い合わせ：北海商科大学　李（b.lee@hokkai.ac.jp）